

「ミャンマーの悲劇を憂う」

2021年04月09日

ミャンマーの軍事クーデターに抗議する国民に軍隊が発砲し、多くの犠牲者を出している。考えられない悲劇である。ミャンマーは旧称ビルマで、1989年にミャンマーと改称した。竹内道雄氏は『ビルマの竖琴』で、ビルマでの戦争で野ざらしになっている日本兵を弔うために、戦後、帰国せずビルマに留まった青年を描いていた。ビルマは仏教国で、温和な国民性と受け止められていたのではないか。ビルマはイギリスの植民地であったが、ビルマ軍と日本軍が共闘してイギリス軍を追い出し、日本軍の統治下におかれた。日本の敗戦後、再び、イギリスが治めたが、1948年に独立を勝ち取った。1962年に軍事クーデターが起こり、以来、軍の独裁政権が続くことになった。ビルマの独立をもたらしたアウン・サンの娘スー・チー氏は、民主化を目指し、国民民主連盟（NLD）を設立し、遊説した。国民は彼女に期待し、支援は膨らんだ。民主化を求める彼女は評価され、ノーベル平和賞を受賞した。軍事政権は彼女を恐れ、15年くらい、自宅軟禁状態に置き続けた。軟禁が解かれた2015年の選挙では、NLDは勝利し、彼女は国家最高顧問という要職に就き、民主化を進めた。軍事政権は、彼女の働きを制限して、憲法を盾に軍の権益を頑強に守り抜いてきた。この間、国民は自由を得、民主化が進み、外国資本が入り、生活も向上した。2020年に選挙があり、NLDは再び、大勝利した。権益を失う危機を感じた軍部は不正選挙があったとし、クーデターを起こし、彼女たちを拘束した。これに対し、国民は軍部への不服従の徴に3本の指を立て、自由と民主化を求め、立ち上がった。彼らは略奪などをせず、平和的なデモを展開した。しかも、誰が指導者というのではなく、国民の声が爆発した自発的なデモである。軍は鎮圧のため銃を発砲し、子どもを含め600人を超える人を殺害した。国民の怒り、悲しみはいかばかりか。ミャンマーは少数民族が多く、宗教も仏教(90%)、キリスト教、イスラム教と多様である。イスラム教のロヒンギャは迫害を受け、バングラデシュなどに逃亡している。難民と化した彼らの姿には胸をえぐられる。現在、空軍は少数民族に爆撃していると言われている。死者と難民は増えていくばかりである。

軍隊が自国民に発砲した事件はあった。1980年、韓国の光州市で、軍政に反対する人々が軍によって虐殺された。死者、行方不明者は2000人とも言われている。1989年に、中国の天安門で、民主化を求める学生たちが虐殺され、その数は不明であるが、3000人とも言われている。軍隊は国民を守るための組織であるが、自国民を殺害する理不尽が起こっている。国連は、ミャンマー軍の国民への弾圧に反対し、制裁を決議したいが、武器を調達しているロシアに、また、経済的に深い関係を持つ中国に反対されることを危惧し、強い態度に出られない状況にある。在日ミャンマー人は涙ながらに、「今、こうしている間にも、同胞が殺されている」と、日本政府にミャンマー軍への抗議を表明することを求めている。日本政府は今まで人権に関する問題には無頓着を装い、曖昧な態度を取り続けている。今回も、残念ながら、明確な態度を表わしていない。

強権的な国、中国やロシアなどに対し、自由と民主主義を標榜する米国、欧州、日本などの国々は連携して抑え込もうと懸命である。しかし、日本政府は、学会の任命問題で、政府の政策に異議を唱える学者たちを拒否した。この対処は、政府に物言えない状況を醸成し、言葉を奪っていく。デジタル改革関連法案は、政府が個人情報を一元的に管理する法ではないか。「デジタル監視法案」とも言われている。日本も自由と民主主義は見せかけで、強権的に国民を管理する国に向かっているのではないかと、深い危惧を持つ。